



サングラスも生産

専務取締役 丹羽 大祐さん

専務の丹羽大祐さんは取引先との窓口業務を担い、海外での折衝もしている

り込んでいきたい」と課題解決に前向きだ。

今後も引き続き「エナロイド」をじっくり育てながら、OEM生産も続けていく。「生き残るには提案力がカギになる」と丹羽さんは分析し、「品質を上げるために施策を生産サイドから積極的に伝え、相手先での開発段階から品質の向上に貢献していきたい」と熱い抱負を語った。

れる場所で磨きをかける。研磨機の中には、研磨剤と研磨を助けるチップを入れ、そこに切削したフレームを投入して6日間回転。すると、角が取れフレームが丸みを帯び始める。その間、途中でフレームを取り出して細かな部分を手作業で磨く。組み立てを終えた後も手作業で研磨。「研磨は高品質を実現する上で最重要」と力強く語る。だからこそ、その作業に多くの時間を費やすのだ。

「すべてが機械化されたわけではありません。手作業で研磨に力を注いでいる分、ある意味で工芸品をつくっている感覚があります」

自社ブランドの復興 若者が手にする老舗の逸品

恵那眼鏡は昭和20年代から自社ブランド「エナロイド」も生産してきた。しかし、OEM需要が増えたことで在庫リスクが高い自社製品の生産が減少。その結果、ブランドが脚光を浴びることはな

と切削加工技術の向上が実現した。手作業だけにこだわるメーカーもあるが、ここでは切削を機械で行う。研磨や鼻パッドの貼り付けは今でも手作業が主流。こうした折衷型の生産体制を築くことで、量を確保しながら高品質を維持できることだ。

中津川市苗木に拠点を置く恵那眼鏡工業（以下恵那眼鏡）は、東海地区の眼鏡フレームメーカー。パートや工程での分業が主流の業界において、創業以来、自社一貫生産方式を採用している。

「国内の眼鏡フレームの生産地と

して有名な福井県の鯖江市でも、一から自社でつくり上げるメーカーは数多くありません」と話すのは3代目代表取締役社長の丹羽真道さん。鯖江は農閑期の収入を確保するため、副業として眼鏡の製造を手分けして始めたことがルーツ。それが今も伝統として息づいている。一方、恵那眼鏡は創業者の丹羽謙さんが大阪から中津川に移り、戦後、事業を

して有名な福井県の鯖江市でも、一から自社でつくり上げるメーカーは数多くありません」と話すのは3代目代表取締役社長の丹羽真道さん。鯖江は農閑期の収入を確保するため、副業として眼鏡の製造を手分けして始めたことがルーツ。それが今も伝統として息づいている。一方、恵那眼鏡は創業者の丹羽謙さんが大阪から中津川に移り、戦後、事業を

た証であり、恵那眼鏡の品質に惚れた。丹羽さんは「美しいツヤとソフトな使用感のメガネ」を高品質の定義に掲げてきた。フレームはシート状のアセテート材を切削して原型とする。その後、バーレル研磨機が設置された「ガラ室」と呼ば

れた。ところが2000年代に入つて、得意先の要請を受け「エナロイド」の生産を活発化する。ブランドアイデンティティも確立され、SNSで情報を発信させるなどして、今やファッショニстыに敏感な人から大きな支持を得られるまでに成長した。業界はファストファッションを代表するように低価格がまだまだ興隆。「差別化対策を立てて売



Craftsmanship makes a "difference"

恵那眼鏡工業株式会社

世界が惚れた技術

約70年間、眼鏡フレームを生産してきた

恵那眼鏡工業株式会社。

技術力と品質の高さが認められて、

海外ブランドのOEM生産を任されている。

近年は自社ブランド「エナロイド」も好調。

老舗の眼鏡製造にかける思いを取材した。



恵那眼鏡工業
代表取締役社長
丹羽 真道さん
「技術者として長年経験値を積み上げてきたからこそ、品質への探求心は人一倍強いと思います」

